HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『貝あはせ』覚書
Author(s)	後藤, 康文
Citation	北海道大學文學部紀要, 47(1), 157-182
Issue Date	1998-10-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33716
Type	departmental bulletin paper
File Information	47(1)_P157-182.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『貝あはせ』覚書

後藤康文

本稿は、『堤中納言物語』所収の一篇『貝あはせ』をとりあげて、従来の注釈書の不備や誤り等をいくつか指摘し、いささかの卑見を述べることを目的とするものである。内容的には、拙稿「『貝あはせ』本文整定試案」(『論集源氏物語とその前後5』新典社、平六・五)の続編にあたるものとご理解いただきたい。

『堤中納言物語』の本文は、高松宮家蔵本(池田利夫解題、復刻日本古典文学館)、宮内庁書陵部蔵桂宮旧蔵本(池田利夫解説、笠間書院)、広島大学蔵浅野家旧蔵本(塚原鉄雄解説、武蔵野書院)、穂久邇文庫蔵久邇宮旧蔵本(久曾神昇解題、汲古書院)、吉田幸一氏蔵平瀬家旧蔵本(吉田幸一解題、古典文庫)、桃園文庫蔵島原本(寺本直彦解題、東海大学出版会)、桃園文庫蔵榊原本(同上)、三手文庫蔵今井似閑自筆本(塚原鉄雄・神尾暢子校注、新典社)の八本を参照し、適当と思われるかたちで引用した(頁・行数の表示については、とりあえず最後にあげた新典社本のものを掲げたが、特別な意味はない)。

また、今回参照あるいは引用した『堤中納言物語』の注釈書その他と稿中における略称は以下のとおり。

・久松潜一『校註堤中納言物語』（明治書院、昭三）……『校註』
・清水泰『増訂堤中納言物語評釈』（立命館出版部、昭九）……『評釈』
・佐伯梅友『新註国文学叢書・堤中納言物語』（講談社、昭二四）……『新註』
・松村誠一『日本古典全書・堤中納言物語』（朝日新聞社、昭二六）……『全書』
・吉澤義則監修『堤中納言物語新講』（藤谷崇文館、昭二七）……『新講』
・上田年夫『堤中納言物語新釈』（白楊社、昭二九）……上田『新釈』
・佐伯梅友・藤森朋夫『堤中納言物語新釈』（明治書院、昭三一）……佐伯・藤森『新釈』
・寺本直彦『日本古典文学大系・堤中納言物語』（岩波書店、昭三二）……『大系』
・山岸徳平『堤中納言物語全註解』（有精堂、昭三七）……『全註解』
・松尾聡『堤中納言物語全釈』（笠間書院、昭四六）……『全釈』
・稲賀敬二『日本古典文学全集・堤中納言物語』（小学館、昭四七）……『全集』
・土岐武治『堤中納言物語の注釈的研究』（風間書房、昭五一）……『注釈的研究』
・池田利夫『旺文社文庫・現代語訳対照堤中納言物語』（旺文社、昭五四）……『対照』
・三角洋一『講談社学術文庫・堤中納言物語全訳注』（講談社、昭五六）……『全訳注』
・塚原鉄雄『新潮日本古典集成・堤中納言物語』（新潮社、昭五八）……『集成』
・稲賀敬二『完訳日本の古典・堤中納言物語』（小学館、昭六二）……『完訳』
・大槻修『新日本古典文学大系・堤中納言物語』（岩波書店、平四）……『新大系』

・土岐武治『堤中納言物語・校本及び総索引』（風間書房、昭四五）……『校本』

なお、各種散文文献の引用は各々所掲の書物に基づいたが、いずれも漢字・仮名づかい等の表記を適宜改めてある。

一

いと好ましげなる童べ四五人ばかり走りちがひ、小舎人童、男など、をかしげなるこわらはやうのものをささげ、をかしき文、袖の上にうち置きて、出で入る家あり。（P70L4～P71L1）

色好みの時空を通り過ぎた蔵人の少将は、やがて子供たちの世界へと誘われてゆくことになる。そのきっかけとなったのがこの情景であるが、手はじめに、右傍線部本文の処理について考えておくとしよう。

ここには従来、(a)「小箱」説（『校註』／『評釈』／『新註』／『全書』／『新講』／上田『新釈』／佐伯・藤森『新釈』／『全註解』／『全釈』）と、(b)「小破子」説（『大系』／『全集』／『注釈的研究』／『対照』／『全訳注』／『集成』／『完訳』／『新大系』）の両説があって、ご覧のとおり、近年では(b)説の方が通説化してきているのだけれども、その根拠はといえば、

○底本ほか諸本大部分「こわらは」、三「こわりこ」、神・河「これりこ」（河、「小破子」と傍記）（函「こわらは」の「ら」の右に「り」と朱書し、「籠破子」と朱傍記）、信本校異（明静院本）「これかこ」、信本校異一本（山岡明阿本）「こはこ」。下文に「てごとに小箱に入れ」、河内本源氏、帚木に「なにくれのこばこやうの物は」などあ

り、「小箱」説は有力だが、伝本上は信本校異（池田本、「こわらは」の本文に「こはこ歟」と傍記）に見える程度で疑わしい。諸本「こわらは」と四字で、かつ「わ」とあって「は」とない点、「こわりご」とみるべきか。（『大系』・補注）

という程度のことにすぎない。たしかに、三手文庫本に「こわりこ（己和里己）」とある点は顧慮する必要があろうが、「伝本上」の問題云々ということでいえば、しょせん「こはこ」と五十歩百歩なのだし、字数が「四字」であり表記が「わ」である現状も、ことの本質を決定的に左右するものではない。それよりも何よりも不思議でならないのは、(b)説を採る諸注の「小破子」に関する注釈の実態で、

○底本「こわらは」。「小破子」、「籠・破子」、あるいは「こばこ」の誤写とも。あるいは桧破子（ひわりご）か。破子は内部に仕切りのある弁当箱。（『全集』・頭注）

○底本「こわらは」とあるのを改めた。「こわりこ」とある伝本もあり「こはこ」という本文もある。いずれも小箱の意で、破子は仕切りのある白木製の食器。食物のほか、もの入れにも用いたらしい。（『対照』・脚注）

○「破子」は、内部に仕切りのある弁当箱。（『集成』・頭注）

○中に仕切りのある白木製の食器。底本「こわらは」。「こはこ」「こはりこ」など異文が多い。（『新大系』・脚注）

などと、その実「破子」の説明をしてお茶を濁しているものが多く、

○こわりごは、わりごの小なるもの。わりごは、食物を入れる器、破子である。（『注釈的研究』・語釈）
○小型の、中に仕切りのある弁当箱。小さめの重箱。（『全訳注』・注）
○内に仕切りのある小型の食器。（『完訳』・脚注）

と、かろうじて「小破子」の説明たりえているかにみえるものにしたところで、具体的な用例はいっさいあげられていないのだ。一般論になるが、注釈書がこのような様相を呈している場合、その部分の注はたいていあやしいと思ってよい。当面のケースについていうなら、まず「小破子」なる容器が当時ほんとうに実在したのかどうか、その点からしてはなはだ疑わしいのである（少なくとも筆者は、「破子」に対する「大破子」は知っていても、「小破子」なる容器の存在を他に知らない）。また、もし万が一、「小破子」がそのころ普通に用いられた日用品だったことが証明されたとしても、「こわりこ」から「こわらは」へという本文転訛の想定にはややむりがあるといえるのではなかろうか。

これらの点で、かつての(a)説が今時の(b)説に勝っているのは明らかだ。原形が「小箱」であるならば、それじたいがごくありふれた器物の名称となるのみならず、『全釈』が推測するように、「こはこ（古）」から「こはらは（良八）」へ、そして「は」と「わ」の交替、という誤写過程もじゅうぶんに認めてよいことになろう。他に名案がない現在、以上の理由から、本稿では「小箱」説の復権を唱えておきたいのである。

なお、これとは別に、つづく「をかしき文」を「袖の上にうち置」くという表現にも、一度は疑義を呈しておく必要があろうか。ちなみに、今回参照した諸注のうちこの部分の具体的状態に言及したものは、わずかに次の三書のみ

であった。

○右手（又は左手）に持って、左手（又は右手）の前腕の上に軽く置く形である。（『全註解』・語釈語法）
○袖の中に入れた手で袖の上の手紙をおさえ、袖でかばうようにたいせつそうに持っているのであろう。（『全訳注』・注）
○大切そうに捧げ持つ様。（『完訳』・脚注）

『完訳』の注は必ずしも「具体的状態」の説明とはいえないが、あるいは、右のうちいずれかの理解にしたがってよいのかも知れない。けれども、そこで多少気にかかるのは、「うち置く」と述べられている以上、このことばの性質上「をかしき文」は完全に人の「手」から離れた状態になければならないのではないか、ということなのだ。もしそうだとするならば、ここは「小舎人童」や「男」が片方の袖を両手の間に渡し持ち、その上に手紙を載せて運んだと考えるよりほかにないのではなかろうか。しかし、実際問題としてはどうなのだろう。そのような手紙の運搬方法が当時一般に行われていたとは少々考えにくいのではあるまいか。となると、「をかしき文」は「をかしげなる小箱やうのもの」の上に「うち置」かれていたのではないかという想像、すなわち、「はこ（盤ヨ）」↓「そて（曽天）」、「ふた（不多）」↓「そて（所天）」といった誤写や、「そて」の「て」を衍字とみて原形を「その上に」と想定するなどの本文改訂案が脳裏を駆けめぐるのだが、今は決定的なことをいう材料がないのでそれはさし控え、諸賢に対して疑問を投げかけておくにとどめる。

二

この姫君と、①上との御方の姫君と、「貝あはせせさせ給はむ」とて、月ごろいみじく集めさせ給ふに、あなたの御方は、大輔の君、侍従の君②と貝あはせせさせ給はむとて、いみじく求めさせ給ふなり。

（P73L3～P74L1）

「私を信用してくれるなら、きっといいことがあるよ」という蔵人の少将のことばにぴたりと足を止めた女童は、忙しくしている事情を彼にうち明ける。ここには、本文整定上の問題が二点。

はじめに、傍線部①。この箇所の処置については、本文を「上、外の御方の姫君」とし「母上が、外（違う）御方の姫君、即ち、異母姉妹になる姫君」と解する説（『全註解』）、同様に、本文を「上、との御方の姫君」とし「母上が、別の御方の姫君」と解する説（『集成』）、また、「上と」を「今」の誤写とみて「今の北の方の姫君」の意に解する説（『全集』／『完訳』）といった異見もあったが、従来の大勢は、「上と」の「と」を衍字と判断して事実上削除する方向にあり、結論をいえば、この考え方で基本的にはよい。「と」が混入した経緯としては、たとえば、(a)「うへ」という仮名表記の横に漢字で「上」と注記されていたものが、「上」と「止」の草体の相似が原因となって仮名の「と」に読み誤られ本文化した、(b)後文でこの姫君のことが「東の御方」と呼ばれているので、「うへ」の横に「東歟」とさかしらに施された傍記が仮名の「と」に誤られて本文化した、などのケースがじゅうぶんに想定可能だろう。

ただし、この〈通説〉を解釈のレヴェルで下位分類してみると、実は、

A＝「奥様の方の姫様」（『新講』）、「北の方の御方の姫君」（佐伯・藤森『新釈』）、「奥方のお所の姫君」（『大系』）、「奥方の方の姫君」（『全釈』）、「北の方とお住ひの姫君」（『注釈的研究』）等、「御方」を「上」の居所とみる（あるいはそうみていると推察される）グループ。

B＝「本妻である方の姫君」（『評釈』）、「北の方の姫君」（『新註』／上田『新釈』／『対照』）、「今の北の方の姫君」（『全訳注』）、「上の御方（本妻の方）の姫君」（『新大系』）等、「御方」を「上」の敬称とみるグループ。

の二様に分かれており、今は両者のうちB説のみを正解としなければならないのである。A説のように、「御方」を「上」の住まいの意味にとるならば、それは当然寝殿の母屋を指すはずであって、「姫君」もまたそこに起居していたことになる。が、この「姫君」は、先にも述べたとおり後に「東の御方」と称され、東の対屋に住んでいることが判明するわけで、そこに決定的な矛盾が生じるからだ。当面の「上の御方」が、次に引用するの諸例に同じく、この単位でもって「奥方様」「北の方様」の意を表しているのは明らかであろう。

・方々の副車、上の御方の五つ、女御殿の五つ、明石の御あかれの三つ、目もあやに飾りたる装束ありさま、いへばさらなり。（『源氏物語』若菜下巻／日本古典文学全集―(4)・P162）

・また、関白殿（＝頼通）ぞ、上の御方（＝隆姫）のゆかりに、よろづあつかひ聞え給ふ。若くおはしつれど、御

心のいとありがたく、めでたくおはしつるありさまに、かく上の御方のゆかりとはいひながらも、ゆゆしきまでおぼしあつかはせ給ふになん。（『栄花物語』巻第十四・浅緑／日本古典文学大系―上・P431）

・これをおろかに思ひて、宮々（＝彰子・妍子・威子・嬉子）に聞えさせずなりにけることを、殿の御前（＝道長）にも、上の御方（＝倫子）にも、かへすがへす口惜しがらせ給ふ。（同巻第十六・本の雫／同―下・P52）

ところで、『角川古語大辞典』は、「上の御方」の見出しを立てて「北方の敬称」と説明したあと、

①上の御方には、御簾の前にだに、もの近うももてなし給はず。（『源氏物語』少女巻／日本古典文学全集―(3)・P55）

②上の御方の女房、出でゐてもの見るに、まづそれをば見で、「この人を見む」と穴をあけさわぐぞ、いとさまあしきや。（『和泉式部日記』／日本古典文学全集・P148）

の二例をその根拠にあげているけれども、これはあまりに杜撰な用例の選定ではあるまいか。①は紫の上の部屋を、②は敦道親王の北の方の居所をそれぞれ指しているのだから。

さて、次は傍線部②。ここの「貝あはせさせ給むとて」に関しては従来、「故藤岡博士は、「衍ナルニ近シ」というてゐる」（『評釈』・語釈）、「衍文であらう」（『全書』・頭註）、「前のが重複して書きこまれたのであろう。除くべきである」（佐伯・藤森『新釈』・語釈文法）、「同一文節が直前にもあり、衍文か」（『対照』・脚注）、「衍文か」（『新大系』・

脚注）といった見方が有力であり、また、そのように判定すべきこと論を俟たないところだが、「衍文」の具体的な発生過程にまで立ち入って説明を加えているのはわずかに『全釈』のみで、「注」において、

○「貝合せせさせ給はむとて」は恐らくは衍であろう。書写者が「大輔の君・侍従の君と」と書きさした後で、前の「この姫君と上との御方の姫君と」に目うつりして「貝合せせさせ給はむとて」と書きついでしまって、やがて気がついて、その衍字の部分に見せ消ち（中略）などをほどこしたのを、その本を更に書き写した人が見せ消ちを見落して写してしまった、というような臆測をすることも可能であろう。

と述べている。大筋においてこの「臆測」は当たっているものと思われるが、私見は多少異なっていて、衍字の範囲に直前の「と」の字を含める、すなわち傍線部②全体がそれに該当すると考えたい。というのも、「貝あはせせさせ給はむとて」だけを取り去った場合、残る文章が「あなたの御方は、大輔の君、侍従の君と、いみじく求めさせ給ふなり」では、いささか落ち着きが悪いように感じられるからである。要するに、格助詞「と」はこのさい不用ではないのか、ということなのだ。そこで本稿では、「姫君」の「君」と「侍従の君」の「君」との目移りを考えて、衍文の発生過程をおよそ次のように推定しておきたい（もっとも、その字数から判断するに、丸々一行分というよりも実際には部分的衍文であった可能性の方が高いかも知れないが）。

①・・・・・・・・・・・・ひめ君
②とかひあはせゝさせ給はんとて
③月比いみしくあつめさせ給にあな
④たの御方はたいふの君しゝうの君
⑤いみじくもとめさせ給なり・・・

①・・・・・・・・・・・・ひめ君
②とかひあはせゝさせ給はんとて
③月比いみしくあつめさせ給にあな
④たの御方はたいふの君しゝうの君
②とかひあはせゝさせ給はんとて
⑤いみしくもとめさせ給なり・・・

以上の結果を踏まえると、はじめの引用本文は、結局次のようなかたちに改訂されることになる。

◎この姫君と、上の御方の姫君と、「貝あはせせさせ給はむ」とて、月ごろいみじく集めさせ給ふに、あなたの御方は、大輔の君、侍従の君、いみじく求めさせ給ふなり。

三

ものぐるほし。まろは、さらにものいはぬ人ぞよ。ただ、人に勝たせ奉らむ勝たせ奉らじは、心ぞよ。いかなる

にかひとものふち。　　（P74L8〜P75L3）

女童に垣間見の算段を決意させた少将の台詞だが、傍線部分は、出来れば今回も避けて通りたかった難解本文だ。当然のことながら、これまでにもさまざまな試解が提示されてはいるのだけれども、なるほどと唸らせるほどの強い説得力をもつものが皆無であるばかりか、率直にいって、「専門家」にしてこのありさまかと唖然とさせられる処理がほとんどなのだ。逆にいえば、それほどにここはむつかしいのである。おそらく、今後も決定的な解釈を得ることは不可能に近いだろう。

とはいえ、確実にいえることが最低限ふたつある。ひとつは、この本文を「いかなるにか」で区切り、「ドウイウワケカ」の意に解さなければならない点。これは常識だと思うが、念のために若干の用例を示しておこう。

・（上略）とのみあるは、何のをかしきふしもなきを、いかなるにか、置きがたく御覧ずめり。
（『源氏物語』朝顔巻／日本古典文学全集―(2)・P466〜7）

・忘れわび侍りて、いとど罪深うのみおぼえ侍りつる慰めに、この月ごろ見給ふる人になむ。いかなるにか、いともの思ひしげきさまにて、世にありと人に知られんことを、苦しげに思ひてものせらるれば
（同手習巻／同―(6)・P300）

・「いかなるにか、心地の例ならずおぼゆる」とのたまふ。
（『逢坂越えぬ権中納言』・P112L6〜7）

・撫子の御人といひし人は、むつましくもありしを、いかなるにか、「見つともいふな」とちかはせて、またも見ず

なりにし。　（『はなだの女御』・P59L8〜P60L3）

したがって、「いかなるに」で文を不自然に切断してしまう注釈書（『全集』／『注釈的研究』／『集成』／『完訳』）はもちろんのこと、「いかなるにか」を「どうなさいます」（『評釈』／『新註』）「さあ、どうします」（上田『新釈』）「どうなんだね」（佐伯・藤森『新釈』）「どうなのです」（『大系』）「どうなのであるか」（『全註解』）「どうして」（『対照』）などと訳す諸注も、この点においてすべて落第だということになる。

もうひとつは、「ひとものふち」の部分にはやはり「貝」ということばが望まれる点。女童が心を動かしたのは、今彼女らがひとつでも多く手に入れたい「貝」に蔵人の少将が言及したからにほかなるまい。よって、「いとものけぢかく」説（『評釈』／『新註』／『全書』／『大系』／佐伯・藤森『新釈』／『全註解』）、「人ものぶる」説（『新講』）、「いとものけだちて」説（上田『新釈』）、「ひとものいふぞ」説（『対照』／『新大系』）、「人も入る淵」説（『全訳注』）には、この基準からして賛同しかねるのである。「ひとものふち」の本文に「貝」を含める方法は簡単だ。すなわち、直前の「か」の字に元来は繰り返し符号「ゝ」が接続していたのだが、転写の過程でこれが脱落したものと考えて、「ゝ」＝「か」を「ひとものふち」の頭に補ってやればよいのである。

さて、ではその「かひとものふち」をどう料理するのか。「かひ」は「貝」、「とも」は接尾語の「ども」、「の」は格助詞とみてそれぞれに落ち着くけれども、問題は残された「ふち」の処理だ。素直に読めば「淵」だろうが、「貝どもの淵」でかりに何らかの意味をなしたとして、それが八九歳の女童にストレートに通じたかどうか（『注釈的研究』の提唱する「淵」と「扶持」との掛詞説については、時代的にみても、また、語法的見地からしてもまったく承認でき

ない)。ゆえに本稿では、暫定案として、「ぬし(奴志)」↓「ふち(婦知)」の誤写を想定し、この箇所の原形を「ぬし」＝「主」と推測しておくことにする(ちなみに、参観八本の字母は、高松宮本・宮内庁書陵部本・広島大学本・久邇宮本・島原本・榊原本・平瀬本で「布知」、三手文庫本で「不知」)。「主」とはすなわち「持ち主・所有者」の意味で、

・きしめく車に乗りてありくもの。耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。わが乗りたるは、その車の主さへにくし。
(三巻本『枕草子』「にくきもの」の段／新日本古典文学大系・P35)

・秋の野に主なき藤袴も、もとの香は隠れて、なつかしき追風ことに折りなしがらなむまさりける。
(『源氏物語』匂宮巻／日本古典文学全集―(5)・P21)

・花盛りのほど、二条院の桜を見やり給ふに、主なき宿のまづ思ひやられ給へば、「心やすくや」などひとりごちあまりて、宮の御もとに参り給へり。
(同早蕨巻／同・P357)

などの例に同じと考えたい。この試案にしたがうなら、傍線部本文は「いかなるにか、貝どもの主」となり、「どういうわけか(奇遇なことに)、(私は)色々な貝の持ち主なのだよ」の意に読めることになる。女童には少将のこのひとことが効いたのである。むろん、これとてひとつの憶説に過ぎないわけだけれども、従来の諸説に比べて少しは気が利いていると思うのは手前味噌だろうか。

四

十四五ばかりの子ども見えて、いと若くきびはなるかぎり十二三ばかり、ありつる童のやうなる子どもなどしてことに小箱に入れ、ものの蓋に入れなどして、持ちちがひさわぐ中に　（P76L3〜8）

蔵人の少将は、「あんな幼い子を頼りにして、もし見つけられでもしたら」と不安に思いながらも、さっそく垣間見をはじめる。その彼の目にまずとびこんで来たのが、この光景だった。が、この部分、実にわかりにくく、諸注の解釈も錯綜している。通説では本文を「子ども見えて」と整定する箇所ひとつをとってみても、ほかに「子とも見えて」説（『大系』）、「事も見えで」説（『新註』／上田『新釈』／佐伯・藤森『新釈』）があり、さらに〈通説〉の理解にしても、その内実は複雑に分岐していてまるで収拾困難な状況なのである。したがって、ここでは全般にわたる諸説の整理はいっさい省略し、要点を絞って私見を述べることにしたい。

思うに、諸注の躓きはまず、はじめの「十四五ばかり」を年齢と解いたところにあったのではないか。なぜならば、すでに十四五歳に達している人間を「子ども」と呼ぶことは、当時の社会通念として普通には考えがたいからである。このことは、

・女の盛りなるは　十四五六歳　二十三四とか　三十四五にし　なりぬれば　紅葉の下葉に異ならず

（『梁塵秘抄』巻二／新潮日本古典集成・一六五頁）

といった今様をことさら引くまでもなく、たとえば、『貝あはせ』の中で継子の姫君の年ごろが「わづかに十三ばかりにや」（P77L2）と記されている、その表現の微妙な意味あいからだけでもじゅうぶんに察知することができるだろう。つまり、子供と大人の標準的な境目が、当時およそ十三歳あたりにあったことは誰もが認めるに吝かでない事実だと思うのである。したがって、「十四五ばかりの」人間を称して「童」といい、また、「若くきびはなる」とはいっても、「子ども」と呼ぶことはまずありえないわけだ。とすれば、例の「十四五ばかり」は年齢ではなく、蔵人の少将の視界に入った「子ども」の総人数を表している、と考えるよりほかに手はあるまい。人数表現としてみた場合、望むらくは「十四五人ばかり」とありたいところだが、それをいうなら、次の「十二三ばかり」もまったくの同罪となる。が、ほとんどの注釈書がこちらについては人数と解しており、しかもそれが正しい判断であってみれば、「十四五ばかり」もまた人数を表しているとみることになんら支障はないはずだ。

そしてもうひとつは、傍線部本文の処理のしかた。ここにも従来、(a)「して、ことに」説（『校註』／『新講』／『全釈』／『対照』／『集成』／『新大系』）、(b)「して、手ごとに」説（『評釈』／『全書』／『大系』／『全集』／『注釈的研究』／『全訳注』／『完訳』）、(c)「と、手ごとに」説（『新註』／上田『新釈』／佐伯・藤森『新釈』／『全註解』）がある。(a)は本文の改訂を避ける立場であり、(b)・(c)は本文に手を加える立場だが、中で強いて採るとすれば(b)説、ついで(c)説だろう（(a)説は、現行本文に対する愚直なまでの忠誠が災いした不自然きわまりない処置としか評せない）。だが、それでもなお釈然としないのは、「して」または「と」という格助詞が当該文脈に調和するとはどうしても思われない点だ。「して」や「と」

を「～といっしょに」の意味に捉えるとして、そう読む以上、「いと若くきびはなるかぎり十二三ばかり」と「ありつる童のやうなる子どもなど」とは別個のものと考えざるをえず、そこに払拭しがたい違和感を覚えるのである。私見によれば、両者は同一のもの（文脈上からいえば、「ありつる童のやうなる子どもなど」が直前の「いと若くきびはなるかぎり十二三ばかり」を補足説明する関係にある）とみなすのが妥当であり、そのための応急処置としては、「してことに」の「し」を衍字とみて抹消し、本文を「手ごとに」と改訂するのがベストだ。およそ一行分相当のちの「ものの蓋に入れなどして」が「子どもなどして」という誤謬本文を機械的に誘発した、すなわち目移りによる「し」の衍字を生み出した元凶であることは、想像するにかたくないところだろう。

以上を総括すれば、本節の引用本文の構造は、

◎十四五ばかりの子ども見えて
　いと若くきびはなるかぎり十二三ばかり
　ありつる童のやうなる子どもなど
　手ごとに小箱に入れ、ものの蓋に入れなどして、持ちちがひさわぐ中に

と考えるべきであり、その大意は、

◎十四五人ほどの子供たち（の姿）が見えて、（そのうちの）とても若くて年端もゆかない者十二三人ほど、（そう、

ちょうど）先刻の女童のような子供たちなどが、手に手に（貝を）小箱に入れたり、何かの蓋に入れたりして、持っては行き交う喧騒の中に

となるのである。「十四五」引くことの「十二三」を、姫君と若君の「二」人だとみるならば、ひとまずは帳尻があうのではなかろうか。

五

やをら見とほし給へば、ただ同じほどなる若き人ども、二十人ばかりさうぞきて、格子あげそそくめり。この洲浜を見つけて、「あやしく、誰がしたるぞ、誰がしたるぞ」といへば、「さるべき人こそなけれ」「思ひ得つ。これ、昨日の仏のし給へるなめり」「あはれにおはしけるかな」とよろこびさわぐさまの、いとものぐるほしければ、いとをかしくて見る給へりとや。

（P89L8～P90L8）

一篇の終局。少将が用意した洲浜を見つけて狂喜乱舞する「若き人ども」。本稿最後にして最大の問題点は、この傍線部本文である。諸注はここに、「若い少女達」（『評釈』）、「童女ら」（『新註』）、「女童達（たち）」（『新講』／佐伯・藤森『新釈』）、「若い女の子たち」（上田『新釈』／『全釈』／『対照』）、「少女たち（達）」（『全書』／『大系』／『全集』／『集成』／『完訳』）、「若い年の程の人たち」（『全註解』）、「女の子たち」（『注釈的研究』）、「若い人たち」（『全訳注』）といっ

た訳を与えているが、中でやや異質に見える『全註解』や『全訳注』にしたところで、

○同じ年の頃である唯、若い女童たちだけ。八九歳の子供であろう。（『全註解』・語釈文法）
○貝合せの朝、童たちが着飾って最後の準備にとりかかろうというときに、美しい貝をいっぱい授けられたのを見つけて、喜びにわきかえっている。（『全訳注』・鑑賞）

と理解していることがわかる。つまり、すべての注釈書が「若き人ども」を女童たちの意に解しているわけだ。が、問題はそこにある。というのも、主人に仕える身分の女性を「若き人」といった場合には、左にこれでもかとばかりにあげた用例が物語るとおり「若い女房」の意味にしかならず、「女童」を指すことないからである。

・少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何のたどりもなく、ふたところ御殿ごもりたるところへ導き聞えてけり。（『思はぬ方にとまりする少将』／Ｐ１１９Ｌ５～８）
・若き人二三人あるは、世にめでられ給ふ御ありさまを、ゆかしきものに思ひ聞えて、心げさうしあへり。（『源氏物語』末摘花巻／日本古典文学全集―(1)・Ｐ３５５）
・大殿ごもるとて、右近を御脚参りに召す。「若き人は、苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心かはしてむつびよかりけれ」とのたまへば、人々忍びて笑ふ。（同玉鬘巻／同―(3)・Ｐ１１３）
・この君の御供なる人、いつしかとここなる若き人を語らひ寄りたるありけり。（同総角巻／同―(5)・Ｐ２９９）

・帳の内に入り給ひぬれば、若君は、若き人、乳母などもてあそび聞ゆ。（同東屋巻／同―(6)・P37～8）
・若き人は、いとほのかに見奉りてめで聞え、すずろに恋ひ奉るに、世の中のつつましさもおぼえず。（同／同・P87）
・右近と名のりし若き人もあり。（同浮舟巻／同・P112）
・同じやうにむつましくおぼいたる若き人の、心ざまも奥なからぬを語らひて（同／同・P141）
・この宮の、いとさわがしきまで色におはすれば、心ばせあらん若き人、さぶらひにくげになむ。（同／同・P158）
・例はさしももてはやさぬを、若き人出だし会はせて、ものなどいはせて、忍びて聞くに（『夜の寝覚』巻一／日本古典文学大系・P73）
・「あはれ、あれが身にてだにあらばや。何ごとを思ふらむ」と、若き人はめでまどひて（『狭衣物語』巻一／日本古典全書―上・P195）
・小宰相とて、心ばへかたちなども、なべての若き人よりはめやすかれば（同巻三／同―下・P97）

なお、同じ『堤中納言物語』の範囲でいうなら、

・若き人の思ひやり少なきにや、「よき折あらば、今」といふ。（『花桜折る中将』／P41L7～P42L1）

などは、たしかに女童を「若き人」と評した記述ではあるけれども、こうした例が彼女の「身分」や「職掌」とは何ら関わりのない表現であって、先の諸例とまったく次元を異にしていることはいうまでもあるまい。

さらに、気になるといえば気になることがもうひとつ。それは、「若き人」の複数形は「若き人々」となることが圧倒的に多い点である。枚挙に遑がないので、今は『堤中納言物語』の中からその例をあげるにとどめる。

・中納言の君の、御帳のうちに参らせ給ひて、御火取りあまたして、若き人々（に）やがて試みさせ給ひて
（『このついで』／P12L2～4）

・また、若き人々二三人ばかり、薄色の裳引きかけつつゐたるも、いみじうせきあへぬけしきなり。
（同／P24L6～P25L1）

・若き人々はおぢまどひければ、男の童の、ものおぢせずいふかひなきを召し寄せて
（『虫めづる姫君』／P66L7～P67L1）

・これを若き人々聞きて、（中略）とて、兵衛といふ人、（中略）といへば、小大輔といふ人、笑ひて、（中略）などいひて笑へば
（同／P71L6～P73L1）

・いふかひなくて、若き人々おのがじし心憂がりあへり。
（同／P94L1～2）

・中納言、中宮の御方にさしのぞき給へれば、若き人々心地よげにうち笑ひつつ、「いみじき方人参らせ給へり。あれをこそ」などいへば
（『逢坂越えぬ権中納言』／P94L3～7）

・中納言まかり出給ふとて、「階のもとの薔薇も」とうち誦じ給へるを、若き人々は、飽かずしたひぬべくめで聞ゆ。

（同／Ｐ１０７Ｌ８～Ｐ１０８Ｌ３）

・ただつねに候ふ侍従、弁などいふ若き人々のみ候へば　（『思はぬ方にとまりする少将』／Ｐ１１８Ｌ５～７）

もっとも、当面の傍線部本文とまったく同じく、

・若き人どもは、心もとなく、ひきさげながらいそぎ来てぞ見るや。

（三巻本『枕草子』逸文「松の木立高きところの」の段／新日本古典文学大系・Ｐ３４２）

・若き人どもの、「われ劣らじ」と尽くしたる装束かたち、花をこきまぜたる錦に劣らず見えわたる。

（『源氏物語』胡蝶巻／日本古典文学全集―(3)・Ｐ１６０）

・南の町も通してはるばるとあれば、あなたにもかやうの若き人どもは見けり。（同螢巻／同・Ｐ１９９）

・ここかしこの若き人ども、口惜しうさうざうしきことに思ひて、いひなやましける。

（同竹河巻／同―(5)・Ｐ５８）

・かたちを好ませ給ひて、今もよき若き人ども参りあつまりて、めでたくあらまほしき御ありさまなり。

（『栄花物語』巻第三十一・殿上の花見／日本古典文学大系―下・Ｐ３４１）

と表現された例も少数ではあるが確実に存在するので、「若き人ども」という本文じたいは正当なものとしていちおう

認めておいてよいようだ。しかし、いずれにしても、この本文に拠るかぎり、ここが「若い女房たち」の意味に解釈されねばならないことに変わりはないのである。

以上のことは、「若き人（々）」が「大人なる」「大人びたる」「大人しき人（々）」、すなわち年配の女房と対比された次のような用例、

・まさなきことも、あやしきことも、大人なるは、まのもなくいひたるを、若き人は、いみじうかたはらいたきことに消え入りたるこそ、さるべきことなれ。

（三巻本『枕草子』「ふと心劣りとかするものは」の段／新日本古典文学大系・P236）

・若き人のある、まづ降りて、簾うちあぐめり。（中略）また、大人びたる人いまひとり降りて、「はやう」といふに

（『源氏物語』宿木巻／日本古典文学全集―(5)・P476）

・大人しき人々、「かやうのさだ過ぎたるさまなどにては、さし出でにくく侍り。よろづの人にただ向ひたるやうなれば。この若き人々だに、『何しに車降りつらむ』と、わびまどひけり」と聞ゆれば

（『狭衣物語』巻三／日本古典全書―下・P113）

・若き人々いみじうおぢさわぐを、大人しき人々は、「いとどさばかりもの恐ろしげにおぼしめしたるに。などかうものぐるほしうおはさうずらむ。（中略）」といへば

（同巻四／同・P215）

あるいはまた、「若き人（々）」と「童（べ）」とが別個のものとして並列された、

・童べ、若き人々の、根ごめに吹き折られたる、ここかしこに取りあつめ、起こし立てなどするを
（三巻本『枕草子』「野分のまたの日こそ」の段／新日本古典文学大系・Ｐ２３９）
・「をかしげなる女子ども、若き人、童べなん見ゆる」といふ。
（『源氏物語』若紫巻／日本古典文学全集―(1)・Ｐ２７５）
・斎院に奉り給ふ女房十二人、ことに上臈にはあらぬ若き人、童べなど、おのがじし物縫ひ化粧などしつつ、物見むと思ひまうくるも
（同若菜下巻／同―(4)・Ｐ２１４）
・若き人も、童、下仕へまで、すぐれたるを選りととのへ、女の儀式よりもまばゆくととのへさせ給へり。
（同匂宮巻／同―(5)・Ｐ１６）
・宿直姿なる童べ、若き人々など出でゐたる姿ども、いづれとなくをかしげにて
（『狭衣物語』巻二／日本古典全書―上・Ｐ３３９）
・若き人々、童べなど、池の舟に乗りて、漕ぎかへりて遊ぶを、御覧ずるなりけり。
（同／同・Ｐ３５９）

などの用例に照らせば、よりいっそう確実なものとなるだろう。継子の姫君の住む西の対にはその実、童（＝子供）たちとは別に若い女房連中が何と二十人も仕えていたのだ！　くどいようだが、「若き人ども」とはすでに成人した女性たちであって、金輪際「少女達」ではありえない。そうである以上、「ミニチュアの楽園」（神田龍身「性倒錯と短篇物語――『貝合』をめぐって――」物語研究4、昭五八・四）、「子供達だけの世界」（伊藤守幸「『貝あはせ』試論」弘前大学国語国文学8、昭六一・三）などといったこれまでの『貝あはせ』評は、すべて修正を余儀なくされること

になる。

ところが、どうだろう。西の対に二十人もの女房が伺候していた形跡はしかし、この作品のどこを読んでもうかがうことができないのである。また、かりにそうであったならば、物語の様相もずいぶんと違ったものになっていたはずではないか。問題を引用箇所に限定してみても、ここに描かれた無邪気な会話や狂騒、「同じほどなる」「格子あげそそく」といった表現のニュアンスは、やはり「少女達」のものとしか考えられないのだ。これは明らかな矛盾である。とすれば、われわれはそれをどのように解消すればよいのだろうか。

おそらく、その解決策はただひとつしかない、と思う。いうまでもなく、本文を改訂するのである。すなわち、現行の「わかき人（＝若き人）」を「わらはへ（＝童べ）」の転訛だと考えるのだ。「ら（良）」→「か（可）」、「は（者）」→「き（支）」、「へ（部）」→「人」の誤写はじゅうぶんに想定可能といえよう（ちなみに、参観八本の字母は、高松宮本・宮内庁書陵本・広島大学本・久邇宮本で「王可幾人」、島原本・榊原本で「和可幾人」、平瀬本・三手文庫本で「和可支人」）。当該本文が「若き人」ではなく元来「童べ」であったとすれば、従来の読みの結果的な正しさを保証するのみならず、先に軽い疑問を呈した接尾語「ども」の問題にもおのずと納得がゆくことになる。「童べ」という語はもともとが複数性を内包していることばであるために、あえて複数形をとることは稀なのだけれども、その場合は、

・童べども御階のもとに寄りて、花ども奉る。（『源氏物語』胡蝶巻／日本古典文学全集―(3)・Ｐ１６４）
・大なるくそ鳶の羽折れたる、土に落ちてまどひふためくを、童べども寄りて、うち殺してけり。（『宇治拾遺物語』巻二―十四／日本古典文学大系・Ｐ１１７）

・この童べども、舟底に寝入りにけり。（中略）童べども泣く泣く降りて、舟つなぎて見れば、いかにも人なし。（同巻四―四／同・Ｐ１５７）

・さがなき童べどもの仕りける、奇怪に候ふことなり。（『徒然草』第二百三十六段／新潮日本古典集成・Ｐ２４６）

などのように、「童べども」としか表現のしようがないからである。

本稿の結論はこのとおりで、傍線部本文を含む一文は結局、

◎ただ同じほどなる童べども、二十人ばかりさうぞきて、格子あげそそくめり。

と改められることになる。が、もしもこの措置を安易な本文操作だと指弾するのであれば、「若き人ども」のもつ意味をよくよく弁えたうえで反駁がなされねばなるまい。

＊

『貝あはせ』は、『堤中納言物語』諸篇の中でも本文の損傷箇所が比較的多い部類に属しているようだ。疑わしい部分が以上で尽きたわけではもちろんないし、本稿および前稿で提示した私案についてもなお吟味を重ねる必要があろう。引きつづき今後の課題としたい。